

平成31年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」結果分析

1 全国・東京都・江戸川区・本校の各教科における平均正答率（単位 %）

	国語	社会	算数	理科
東京都	67.0	66.3	60.0	56.6
江戸川区	63.7	64.2	56.1	53.0
本校	66.0	68.5	60.6	53.3

すべての教科で江戸川区平均を超え、社会、算数は都平均を上回りました。学力向上に向け、来年度も、今年度効果の見られた取組を継続して進めることが求められます。

2 各教科の結果と分析

(1) 国語科について

ア 正答数の分布（A層～D層）126人

	正答数	児童数	割合
A層	15～18問	25名	19%
B層	13～14問	31名	24%
C層	10～12問	42名	33%
D層	0～9問	28名	22%

イ 正答率が都正答率以下の問題

- ・場面の様子に気を付けながら物語の全体を捉える問題においては、正答率が全国50.1%に対して、本校は41.3%と8.8%下回った。【4-(1)】
- ・手紙の後付けを考えて書く問題では、全国44.4%に対して、本校38.2%と6.2%下回った。【5-(3)】
- ・主語、述語の関係問題では、全国38.5%に対して、本校30.2%と8.3%下回った。【7】

ウ 分析（本校児童が得意としていること、苦手としていること）

- ・本校が全国平均を上回った問題は【言語についての知識・理解・技能】問題、【話す・聞くの発表の内容を正確に聞き取る】問題である。
- ・書いていることや話していることについて、正確に内容を理解することは、得意であると言える。しかし、読み取ることはできるが実際に手紙を書いたり、文章を構成したりする場面になると書いた経験がない、もしくは少ないため、書くことが難しいと考える。
- ・漢字の読み取りは得意だが、主語述語の関係の理解が不十分で、文章を正しく構成することが苦手である。文章の意味が明確になるように、語と語のつながりを考えるが必要である。

(2) 社会科について

ア 正答数の分布 (A層～D層) 126人

	正答数	児童数	割合
A層	15～18問	41名	32%
B層	12～14問	40名	31%
C層	9～11問	22名	17%
D層	0～8問	23名	18%

イ 正答率が都正答率以下の問題

- ・平均以下だった問題は19問中6問であった。
- ・平均以下の6問中、都平均を5%以上下回った問題は2問あり、2問とも23区のごみについての問題であった。
- ・複数の資料から、23区全体のごみの量と、そのうちめ立てをした量について読み取る問題では、東京都の正答率66.1%に対し本校は57.9%と8.2%下回った。
- ・資料から読み取ったことを根拠として、東京都の廃棄物の処理についての課題とその解決に向けて必要なことについて考える問題では、東京都の正答率70.9%に対して本校は63.5%と7.4%下回った。

ウ 分析 (本校児童が得意としていること、苦手としていること)

- ・正答率が東京都の平均より5%以上上回った問題は6問あり、その中でも自分たちが通う学校がある地理的位置を理解しているかの問題では本校の正答率は84.1%と高く、東京都の平均を24.6%も上回った。また東京都の特色ある地域の地理的位置について理解しているかの問題では東京都の正答率65%に対し、本校は73.8%と8.8%上回った。
- ・東京都の平均を5%以上下回った問題2問については、どちらも資料を読み取る問題である。グラフなどの読み取り方や比較の仕方などを授業でも意図的に取り入れていく必要があると考えられる。

(3) 算数科について

ア 正答数の分布 (A層～D層) 126人

	正答数	児童数	割合
A層	21～26問	31名	25%
B層	16～20問	42名	33%
C層	11～15問	27名	21%
D層	0～10問	26名	21%

イ 正答率が都正答率以下の問題

- ・算数では、特に大問1(3)「帯分数+帯分数の計算(同分母)」の誤答が目立ち、都正答率81.6%に対し、本校正答率は62.7%で、18.9%下回った。整数部分への繰り上がりが定着していないものと考えられる。

大問3(1)「いろいろな四角形の特徴(辺、対角線)について理解している」では都正答率

40. 8%に対し、本校正答率は34.9%で、5.9%下回った。正方形とひし形の特徴で混合してしまったと考えられる。

ウ 分析（本校児童が得意としていること、苦手としていること）

本校正答率が大問で全問、都正答率を上回ったのは、大問6「計算のきまり」、大問7「でこぼこした面積を求める」、大問9「何倍かを求める計算」、大問10「資料の読み取り」だった。特に大問10「資料の読み取り」では、例年、複数の資料を読み取ることを苦手としている児童が多かったが、今年度は2問とも都平均を上回った。普段の授業や、ベーシックドリル、補習、宿題等で繰り返し指導してきた成果だと思われる。しかし、正答率はそれぞれ48.4%、45.2%とどちらも50%を下回っているため、今後も継続した指導を行っていく。

一方、大問で全問、都正答率を下回ったのは、大問4「数量関係をもとにして、式に表したり、答えを出したりする問題」である。(1)①が解けないと、必然的に(1)②も間違えてしまったり、(2)になると急に難しくなる問題だが、例年、似たような問題でつまづいてしまったりする児童が多いので、類似問題を繰り返し行い、どこに注目したらいいのか考える力を身に付けさせていく。

(4) 理科について

ア 正答数の分布（A層～D層）126人

	正答数	児童数	割合
A層	14～19問	23名	18%
B層	11～13問	38名	30%
C層	8～10問	36名	28%
D層	0～7問	29名	23%

イ 正答率が都正答率以下の問題

大問4－(1)「乾電池とプロペラを一つの輪のようにつないだときの名称」を答える問題では、「回路」、「電気回路」、「電気回路」と答えられない割合が高く、無回答も目立った。

要因：乾電池から出て、乾電池に戻るまでの電気の通り道を科学的な言葉として理解していない。

対策：科学的な言葉や概念を使用して考えたり説明させたりする活動を取り入れる。

大問5「閉じ込めた空気は押し縮められるが、水は押し縮められない」ことを問う問題では、「空気は押し縮められる、水は押し縮められない」ことを正しく答えられない確率が高かった。

対策：学習を通して身に付けた知識を実際の自然や日常生活に当てはめて考えさせる。また、説明させる活動を取り入れる。

大問8－(2)「水は温度によって、水蒸気や氷に変わる」ことを問う問題では、「水じょう気」、「水のじょう気」、「水」、「水分」と答えられない割合が高かった。

対策：100℃近くになると出てくる泡を空気と答える誤りが多い。科学的な言葉や概念を使用して説明させる活動、指導を繰り返す必要がある。

ウ 分析（本校児童が得意としていること、苦手としていること）

得意…実験器具の基本的な操作方法や知識、季節と生きものの様子についての知識・理解。

苦手…結果をまとめた表や文から適切に考察し、科学的な言葉や概念を使用して活用すること。

実験してわかったことを、確かな知識として定着させることが十分ではないと考えられる。